

る素晴らしい論考だ。

倉田 徹  
(香港現代政治)

私が追い続けた香港の民主化は潰えてしまった。こんな年は、視野を時間・空間軸に沿って広げるしかない。その過程で出会った書物たち。

香港の過去を踏まえて現代を描いたのが Stephen WK Che と Kaiton YK Si の Hong Kong Society (Palgrave Macmillan, 2022)。国際センター、難民キャンプ、自由経済、アジアのハリウッドなどと形容されてきた香港の集態を、これまでの研究を引きつつ斬新な視点で改めて描き出す、全く新しい香港論。政治的制約により、本来香港人が読むべきこの書物の中国語版が出版されないのが寂しい。できれば邦訳して日本の読者に届けたい一冊。

香港人は二〇一九年の抗議活動で政権と正面から対峙し、初めて新疆の人たちの境遇を他人事ではないと捉えるようになった。新疆を歴史から現在まで通貫して記した熊倉潤の『新疆ウイグル自治区』(中公新書、二〇二二年)は、新たに新疆を知る人にとって信頼できる読案内の一冊だろう。一方、香港や新疆で起きていることを理解するには、統治する側の論理を知るのも肝要だ。高橋伸夫の『中国共産党の歴史』(慶應義塾大学出版会、二〇二

二年)は、多角的な資料を引いて共産党の二〇〇年史を描いた大変な労作だ。この二冊はいずれも、極めて慎重な研究者によって書かれた良質な学術書であるが、そうした書物にありがちな退屈さとは無縁の文体で快適に通読できる。抑制された筆致ゆえに、流血の歴史の描写はかえってリアルであるし、真実に迫らんとする研究者の覚悟も伝わってくる。

一呼吸置きたくなったときには、一九八四年に刊行され、最近文庫化された山口文憲の『香港世界』(河出文庫、二〇二二年)に救ってもらった。洒落たピアノの響きから始まる多彩な随筆は組曲のようである一方、庶民の暮らしの描写からは香港のあの匂いや湿度まで漂ってきそう。コロナと国家安全法に阻まれて行けなくなった香港に、私はいつ再会できるのだろうか。

阿部公彦  
(英文学)

1 平尾昌宏『日本語からの哲学——なぜへです・ますで論文を書いてはならないのか?』(晶文社)

はつきり言って悔しい。これは私が書きたかった本だ。「ですますオタク」を自認していたのに先を越されてしまった。読みながら「そう、そこなのよ」というポイントが次々に出てくる。それにしてもこの著者、カッコ

の使い方がうまい。

2 江利川春雄『英語教育論争史』講談社選書メチエ

日本の英語教育は決して「進化」をたどったわけではなく、論争、迷走、失敗、撤退の繰り返しだった。「審美色の改革」に陣らされる前に、歴史を振り返るべきだろう。本書はその道の第一人者による簡潔な概観。二〇二二年は東京都の都立高入試でのスピーキングテスト活用をめぐる大きな反対運動が巻き起こり、行政の迷走があらためて印象づけられた年だった。

3 玉井峰・末廣幹・岩田美喜・向井秀忠編著『コメディ・オヴ・マナーズの系譜——王政復古期から現代イギリス文学まで』(音羽書房鶴見書店)

コメディ・オヴ・マナーズは通常、一七世紀から一八世紀の英演劇界で流行した、風刺的な演劇作品を指すが、本書はその「系譜」が現代にまで至るとの見立てをとったところが興味深い。なるほど、いろいろ腑に落ちる。

4 平野啓一郎『死刑について』(岩波書店)

あえて専門の枠にとどまらずにフィールドを移動しながら、理念、意見、実感を接続する。性急な思考には走らず、適度にブレイキをかける。死刑について考える出発点になる本だった。

5 西村賢太『雨滴は続く』(文藝春秋)

二〇二二年は著者急逝のニュースから始まった。絶筆となった本書は著者の最後の推敲をへていない。生きておられたら、西村さん、どんなふうに直しただろうと考えてしまう。でも、完璧に直していない分、筆遣いの至近性も感じられる。しみじみめそめそしながら読みたいところだが、あの手この手で笑わせてくる。素直に笑いながら読むしかない。

瀬名秀明  
(作参)

1 ジェシー・ノーマン『アダム・スミス 共感の経済学』(村井章子訳、早川書房、二〇二二年)

2 安藤俊介『私は正しい——その正義感が怒りにつながる』(産業編集センター、二〇二一年)

3 ブライアン・グリーン『時間の終わりを——物質、生命、心と進化する宇宙』(青木薫訳、講談社、二〇二二年)

4 同志社大学良心学研究センター『パンデミック時代における良心』(同センター発行、無償配布版二〇二二年 Kindle版二〇二二年)

5 寺島実郎『日本再生の基軸——平成の晩鐘と令和の本質的課題』(岩波書店、二〇二〇年)

二〇二二年はほとんど何をやって過ごして

いたのか思い出すことができない。というのは、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に関連する書籍や雑誌の特集号が日本でこれまでどれだけ出たのか、夏以降はそのリストづくりにほとんど生活の大半を費やし、またCOVID-19と《総合知》についての書籍をまとめるために参考書を読み漁っていたからである。その成果はなんとか二〇二三年二月に共著作『知の統合は可能か——パンデミックに突きつけられた問い』のタイトルで刊行できそうだが、この原稿を書いている時点ではまだリストづくりも原稿も終わっていない。

読書記録を見直す、今年にはプラトン『バイドン』(光文社古典新訳文庫)もキェヌターヴ・ル・ボン『群衆心理』(講談社学術文庫)も平野啓一郎『私とは何か』(講談社現代新書)もアリストラテス『心とは何か』(講談社学術文庫)もトマス・ペイン『コモン・センス』(光文社古典新訳文庫)もビエール・テイヤール・ド・シャルダン『現象としての人間』(みすず書房)もジャン・ポール・サルトル『実存主義とは何か』(人文書院)もエドワード・O・ウィルソン『知の挑戦』(KADOKAWA)も読んだことがわかるのだが、すべて《総合知》を考えるための手探り状態での読書だった。本当にそれらが自分の血肉となるのは、自分の書籍が出た

後かもしれない。

そんな中で事前の予想以上にインパクトを受けたのがこの五冊だった。どれも不意打ちのような感動を覚えた。アダム・スミスの説いた公平な観察者とは何であったのか、正義感と信念(コアビリーフ)はどのような関係なのか、知の統合とはどのような行為か、良心(共にgg知るscience)という言葉に託した新島襄の人間の未来像はどのようなものであったのか、そしてCOVID-19がもたらしたたくさん問題の本質はいかにそれ以前に存在しており、なぜ私たちは目の前にあったのにその本質に気づかず暮らしてきたのか——見まったく分野の異なるこれらの書物をひとつの本の中で論じることができて初めて私たちは総合知へ向けて一歩を踏み出せるのだという確信を、信念(コアビリーフ)を持たせてくれた五冊だった。

その信念が本当に正しいのかどうかはわからない。だが、ほんのわずかではあるが、かつて作家の小松左京が成そうとしてついに成し得なかった、世界の「総体」と人間の知の結びつきを(再)構成すること、その端緒まで辿り着くことはできたのではないか、といま感じながら、書籍の最終作業を進めている。

もちろん、私が抱えているこの信念(コアビリーフ)は、間違っているかもしれない。それを受け入れ、間違っていたら手放せる余